

# 直言

日中平和友好条約交渉は、いわゆる「覇権」問題をめぐって、暗黙に疑りあげたかの親がある。一般論として「覇を称えず」（毛沢東指示）とか「覇権を求めない」（日中共同声明）

とか「覇権主義に反対する」（社会党訪中団と中国側との共同声明）と

いうのであれば、誰も異を唱えるべきものではないの

だが、中国側は、明白な対ソ非難の文脈のなかに「覇権」問題を位置づけているために問題の根は深い。

ところで、中国が明白な政治的含意をもって「覇権」という言葉を表明しはじめたのは、「いわゆる『ブレジネフ・ドク

トリン』とはまぎれもない覇権主義である」と語った一九七〇年春からであり、それだけに、

## 「覇権」という危険な言葉

なか  
じま  
みね  
お

中嶋嶺雄

中国の辞典類（たとえば「新華字典」七一年版）からは逆に「の言葉が消えてしまったことなどについては、私はすでに別のところで述べたが、その後、調べていると、毛沢東が一九四六

のきりにおいて、強烈な対ソ主義の立場で中国側に同調したことになる。

「覇権」という言葉が本来の漢語ではなく、日本語からの移入であり、従って、この言葉が一般名詞としてではなく、明白な政治用語になった七〇年代の

いる。邦訳では一般にこの部分は「世界制覇」となっているが、原文は「覇権」である。一九五三年の「新華字典」初版本が一般名詞として「覇権」を載せているのは、「すべての反動派はハリコの虎です」という毛沢東思想の出典として知られるアンナ・ルイス・ストロンク女史とのこの有名な談話のなかに、「覇権」が出ていたからであらうが、それにしても、当時の毛沢東の世界認識・対ソ観と今日のそれとの大きな隔たりに、いまさらながら驚かざるを得ない。一つの言葉の意味も、このように変化するのであるから、国家百年の計をト（ぼく）すべき条約においては、危険な言葉、は禁句でなければなら

な政治用語になった七〇年代の

のなかで「覇権」という言葉を

（東京外大助教）